大会出場生徒の声

成長

新潟明訓高等学校
小山　加恋

私たちは今回、吉田勉・作「シリコダマ」を上演しました。

この作品を通して、私たちが最も伝えたかったことは、「リーダーのあり方」です。「リーダー」とは、ただ他の人に指示を出す人ではなく、仲間のことを理解し、信頼した上で導いていく人のことだ、というのがこの作品のメッセージとなっています。

特に工夫したところは、平台を暗転中に、水に沈むバスに大変身させるところです。どうしても暗転が長くなってしまうため、できるだけ観客を飽きさせないように、セリフを入れたり、転換の最後に役者がバスの上に避難する様子を見せたりするなどの工夫をしました。

地区大会では、多くの反省点が見つかりました。その反省点を生かして、県大会に向けて、改善に努めました。県大会への出場という経験は、私たちを大きく成長させてくれました。最後までみんなと全力で取り組めてよかったです。

新潟明訓高校

心を動かして

高田北城高等学校
大塚　満智子

「ON　AIR」は高校の放送部を舞台にした劇で、主人公の藤井あやかがかつての仲間たちへの償いをし、自分の気持ちに整理をつけて前向きに生きようとする物語である。

私が藤井を演じる上で大切にしてきたことが、演じる私自身、心を動かしながら演技をするということだ。

この劇の終盤では、今までラジオパーソナリティとして話していた藤井が、マイクの前で自分の気持ちをさらけ出すシーンがあり、大きな見せ場となっている。

「私が彼女と同じ状況だったらどう思うだろう」と自分と彼女との共通点を探しながら稽古する日々だった。

誰かの心を動かす劇にしたい。そう思って臨んだ大会では、上演後、たくさんの方々から嬉しい感想をいただき、温かい気持ちでいっぱいになった。

舞台に立ったのは私一人だけれど、私だけでは決してここに立つことはできなかったと思うと、一緒に作ってくれた仲間や支えてくださった方々に、改めて感謝の気持ちを伝えたい。

高田北城高校

県大会に出場して

巻総合高等学校
土田　結菜

巻総合が選んだ作品は、尾崎亜子さんが書かれた『キッズ・アー・オールライト！』という作品です。新入部員が多い中、初舞台は楽しいものにしたいという思いからこの作品を選びました。

工夫した点は、それぞれ割り当てられた役が自身の性格と異なるものが多く、キャラクターを掴むために何度も部員同士でディスカッションを重ねたことです。他にも、地区大会の審査員の先生の意見を参考にしながら、アニメのような雰囲気になるように、役の身振り手振りを極端に大袈裟にしたりしました。結果は入賞できずじまいでしたが、後輩や同級生から楽しかったという声が多く、とても充実した三年間でした。お越しくださったお客様や審査員の先生からも「地区大会より凄かった」という言葉をいただき、これからも演劇を続けたいという思いが強まりました。ありがとうございました。

巻総合高校

優良賞
斎藤道男賞（照明賞）
長岡　「ＦＬＯＡＴ」
クラーク記念国高校演劇部／作
鶴巻昌洋／潤色

長岡高校は、昨年度に引き続きスケールの大きな芝居を上演した。大きいとは、セットや演技や演出、物語の内容である。今現在、新潟県でそのような芝居に取りくみ、そして、芝居としてしっかりと成立させている学校は、長岡高校演劇部だけだと私は評価している。にもかかわらず、県大会で「審査において評価」されなかったのは、この作品が全国最優秀作品であり、当時の上演校の全国レベル、いやプロレベルの上演と比較されたためではないか。しかし、その挑戦を私は高く評価する。

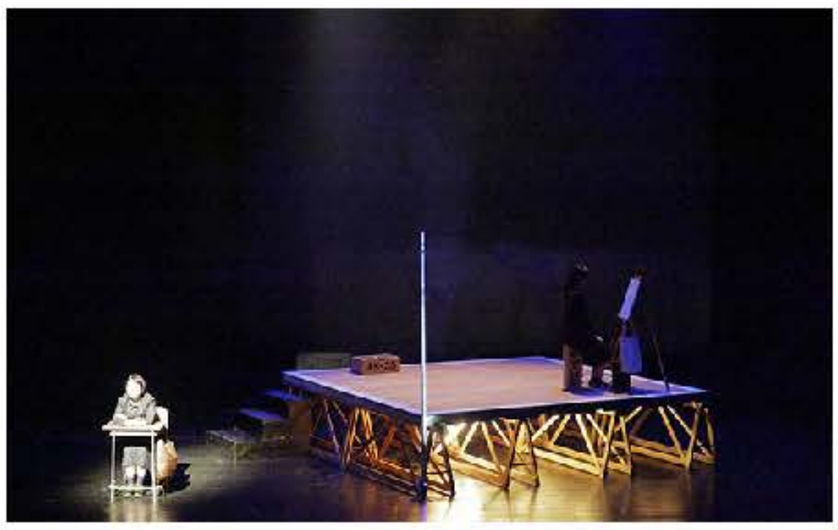
長岡高校

優良賞・審査員特別賞
長岡向陵　「あおにとける」
川上そよ香・浅川美代子／作

長岡向陵高校は、ここ数年、台本に真っ正面から向き合った芝居をする。その芝居に向き合う姿勢が、芝居にも出ており好感が持てた。私自身、自分の芝居の作り方を考えさせられる素晴らしい作り方だと思う。役者も自然に役にはまっている。また、その芝居作りはセットや照明・音響にもあらわれており、芝居をうまく助けている。申し分ない。今後、突き抜けるためには、そうではない部分もあった方がいいのかもしれない。

優良賞・審査員特別賞
万代　「あおにとける」
川上そよ香・浅川美代子／作
引場道太／潤色

万代高校の作品は、前述の長岡向陵高校と同作品の上演となった。台本の物語自体は、高校演劇のスタンダードなものなので、その演出や照明・セットに大きな違いが出た。万代高校の作り方は、巧みでセンスが良く、また2人の役者もよく稽古され、完成されている印象だった。今後、自分たちのオリジナリティーが出てくると更に良くなるのではないかと思う。


万代高校

長岡向陵高校

優良賞
三条　「ドッペル・クラウンとおもちゃ箱」
ＭａＲｕ／作

三条高校の県大会出場は久々である。しかし、上演は非常に落ち着いており県大会上位の学校と比較しても、その演技は遜色なかった。衣装も凝っていて、役柄とマッチしていた。きっと良い衣装係が三条高校にはいるのだと思う。衣装賞がないのが残念だった。また、衣装だけでなく役者にも力があったので、脚本の物足りなさが目立った。良い台本であれば、もっともっといい芝居を出来るはずなのにもったいないと思って観劇していた。来年はさらに期待できる。

三条高校

優良賞
敬和学園　「エールの時間」
中原久典／作
阿波加寛／潤色

今年の敬和学園は、昨年度と比較して様々な点でレベルアップしていた。特に、大人数にも関わらずそれぞれが際立っており、その立ち位置などもよく計算され、稽古されていた。きっと多くの時間を稽古に当てただけでなく、チームワークも良いであろうことが観劇していて感じ取れた。このレベルアップは、今後の敬和学園を大きく飛躍させるに違いない。

敬和学園高校